
犬と猫

香箱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬と猫

【Nコード】

N8844Y

【作者名】

香箱

【あらすじ】

そうだ、京都へ行こう！

第一幕

想像して欲しい。暫く履いていなかったジーンズを引つ張り出し、足を通して、何となくポケットに手をつ込んでみる。すると、指先がポケットの奥で何かに触れ、摘まみ出せば、絡まった糸屑が指の間でぷらぷらと揺れている。

…大学における僕の立ち位置は、そのジーンズの構成要素において、件の糸屑と同等と想ってくれていい。

カンカン照りの九月の空を恨めしく見上げながら、駐車場から大学への道を歩く。

晴れた空は嫌いなのだ。インドア派の僕の、まるで絹のように繊細な肌には、殺人光線ばりの直射日光は痛くて仕方がないし、「さあ今日もさわやかな一日だよ!」と、こちらの機嫌も考えずに一方的に押し付けて来るデリカシーのない青さも気に食わない。

僕としてはこんな日は一刻も早く我が心のオアシスことエアコンの効いた講義室に辿り着きたいのだけど、駐車場から大学の構内まではそこそこの距離があり、そのそこそこに長い道のりを、道幅一杯に並んだ学生達が占領し、談笑しながらのろろ歩いているものだから、僕もまた牛歩戦術中の先生方のごとく、仏頂面でのろろと歩くしかないのだ。「君も学友と話せばいいではないか」と問う向きもあるだろう。しかし残念ながら、流石の僕も虚空と語り合うスキルは今のところ未習得となっている。

けれど眺めるにつれ、不思議にも思う。毎日毎日、飽きもせずに彼らは何を話しているのだろうか。

思うに、さして中身のあることは話してはいまい。耳に入り込む断片から察するに、恐らくふわふわとして、甘く、楽しげな、マシユマロのようなことを話しているのだろう。

…まったく、実に嘆かわしい。モラトリウムにおける青年の正しい有り様とは、内なる自己との対話、そして真理の追求にあるのではなかったか。それらの苦悩、煩悶の果てにこそ、人は確固たる自己を確立し得るのだ。第一、そんな風に年がら年中ペチャクチャしていても、舌の根どころか脳まで乾いて味噌がスルメと化してしまっているのではなからうか。

…しかし僕の心配をよそに、前列では相変わらずにふわふわキヤハハとマシユマロトークが続いているのである。

学生達の未来に要らぬ心配を巡らせている間に大学の建物が見えてくる。

蟻の巢の入口のような裏門を抜けて、僕はB棟のドアをくぐる。天使の抱擁のようにふわりと冷気が僕を包む。うむ、心地よい。喫煙所が近いからいささかヤニ臭い天使だが、そこはご愛敬だ。

定刻も近い。颯爽と階段を駆け上がり、二階の講義室に駆け込む。空いた机に滑り込んで、ルーブリーフのノートを開く。やがて肅々とした雰囲気のある場に老教授が聖人のように背後のドアを割り現れて、いよいよ有難い講義が始まる。

だが直後、教授の余りの滑舌の悪さに僕は卒倒した。

…起きた。いつもながら酷い目にあった。滑舌の悪い人間は講義など受け持つべきではないと思う。

まあ、何を言っているか分からないが、きっとあの老教授はその欠点を補って余りある、広大にして深淵なる知識を有した名教授なのだろう。

そこから発せられる学問的オーラを一身に浴びるだけでも、低血圧改善、新陳代謝の増進、偏頭痛の解消など、種々の有難い効果があるに違いない。

ともかく勉強の時間はひとまず終わった。さあいざ赴かん、麗しの図書館へ！

僕の学生生活を語るにあたって、図書館を語るとは避けては通れないだろう。

むしろ図書館を語ればこと足りるとも言える。

図書館は大学の正面口から見て左手にある。深いグレイの壁と縦に切れ込んだアートな窓が印象的な建物だ。

一回生の頃はその余りにアカデミックな空気に気圧され、必要最低限にしか足を運ばなかったものだが、死んだ魚の目がデフォルトの2回生となり、その糠床のように熟成された眼力で僕はそこに二つの楽園を見出した。

即ち、勉強用の半個室とパソコンコーナーである。

勉強用の半個室は駄目学生の仮眠のためにあるとも言っている素敵スポットであるから説明は不要として、パソコンコーナーの素晴らしいさを語るには、僕の置かれた孤高かつ不毛、不毛かつ孤高な現状について説明するべきであろう。

説明する。説明するぞ。そう。あれだ。要するに。言つなれば。結局のところ。僕は…

「ぼっち」、なのである。

「ぼっち」とは、独りぼっちから生じた俗語であり、主に学生のコミュニティにおいて絶海の孤島と化した存在を指す絶望ワードである。

絶望ワードの名に恥じず、その称号は一度張り付くやいなや、しつこい油污れも真っ青の強情さで付きまとい、薔薇色の学園生活を容赦なく黒一色に塗り潰していくであろう…と学生達に古来より伝わり、心底恐れられている。

…僕はツチノコやチュパブラと並び、そんな伝説的な存在と化してしまったのだ。

とはいえ、僕も大学生になるまでは「ぼっち」であつた訳ではないし、それなりに新生活に希望を抱きこの大学へとやって来た。

それが、何かおかしいぞと感じ始めたのは入学3ヶ月後。そして

半月後、予感は確信へと変わった。

心の中の師、曰く「お前には新しいコミュニティーに入り込むスキルが絶望的に欠如している」。ごもつともである。だが、この師の問題点は、問題を教えてはくれても、解決法までは教えてくれないことだ。

…ともかく、小中高と片田舎にある学校に通ってきたこともあり、クラス替えもろくになく、周りにいたのはいつも同じ面子だった。こちらから働き掛けなくとも、いつの間にか僕は輪の中にいたし、騒ぐのも嫌いじゃなかった。

だから、僕は自身のその欠点に気付けなかったのだ。

さて、知る人は知っていようが、一見していかに賑やかで楽しげに見えようとも、大学とは人間関係こそがものを言う、サバンナも真つ青の弱肉強食の世界である。

俗にリア充と呼ばれる、ゾウやキリン、シマウマにライオン、その他諸々の強大な生き物の影に怯えながら、俗にコミュ障と呼ばれる、カエルやトカゲ、ネズミやミミズだって実はひっそり慎ましかに暮らしているものだ。

そして、そんなヒエラルキーのスタートラインにすら立っていない僕は、世界に放り出された一匹の金魚であった。

競争以前に慣れない地上で口をパクパクさせ、座して死を待つのみといった案配だったのである。

…別に独りは嫌いでもないが、周囲が賑やかなせいか、それがやたらにチクチクと身を刺す。

お隣さんが宝くじに当たったようなもので、気にしなければいいのに、そこは人の悲しさ。幸せそうな他者が四六時中溢れていると、感じたくもない卑屈さが滲んでくるものだ。

負のオーラは更に人々を遠ざけ、それが性根を更にひん曲げる。鬱屈とした無限ループ。いや、時計のように回転し続ける性根と、深まる人恋しさの「ぼっちスパイラル」とでも呼ぼうか。僕はベートーベンも裸足で逃げ出すような苦悩の日々を送っていた。

恐らくあの頃の僕を霊能力者が目撃したのなら、即座にあらん限りの聖水をぶちまけたに違いない。そして僕はシューシューと白煙を上げ、消え失せたことであろう。

とかくそんな折、僕はあるサイトに出会った。そして、そこにどうにか正気を保ち得る僅かな道を見出し、パソコンコーナーへ入り浸るようになったのだ。

いつものようにパソコンコーナーの受付を済ませた僕は、ポータルサイトの検索窓に「フクロウ亭」と入力し、その粗末なサイトの簡易チャットへ潜り込む。

メッセージ：kenさんが入室しました

ken：世界よ滅べ！

メッセージ：夢猫さんが入室しました

夢猫：滅ぶんならお一人でどうぞ、先輩

ken：寂しいではないか

夢猫：なんなら僕のフィギュアもお供につけましようか？

ken：せつかくなら生身がいい…

夢猫：贅沢ですね。先輩にお似合いの生身なんて、このマグロのお刺身がせいぜいでしょーに。（ヒラヒラ）

ken：ぬ！ 貴様昼からマグロなんて食ってるのか！ 引きこもりの癖に！ よこせ！ 今すぐよこせ！

夢猫：いーですよー。取りにいらっしやいな。ほーれほーれ。（ヒラヒラ）

ken：おーのーれー

—
なんだこの現状は、と自分でも思う。

だが、僕を「先輩」と呼び、ほとんど常にチャットを監視しているらしいこの変人だけが、今の僕にとって、唯一の他者との繋がりになっていた。

夢猫：この容姿端麗な男前を捕まえて、変人とはなんですか、変人とは！

ken：だつて変人だろ？

チャットじゃ顔も見えないしなあ。ひょっとして容姿端麗ってより妖怪人間って方が近いんじゃない？。

夢猫：ムキー！先輩！今すぐ京都へ来たまえ！

ken：えー、無理無理。

夢猫：でも、どうせ先輩、相変わらず白黒コピーみたいな味気ない生活しとるんでしょ？

夢猫：学生さんは時間あるんやから、どこか旅行でもしとくと良いですよ、ほんと。

ken：…んー。

夢猫：（もぐもぐ）

ken：…考えとくわ。ってまだ昼飯食つとるんかい！

夢猫：欧米型のスローライフを実践しとりまして、ランチタイムには一時間以上かけるようにしとるんですよ（もぐもぐ）

ken：引きこもりはこれだからなオイ。
んじゃ、講義行ってくるわ。

夢猫：はいな、お疲れ様です。

メッセージ：kenさんが退室しました

メッセージ：夢猫さんが退室しました

説明はこんなものでいいだろうか。以上が僕の暗澹たる、そして少し風変わりな大学生活だ。

大学から目を離すと、他には二つ程しか語ることはない。

まず一つは、アルバイトのこと。

家から近いこともあり、僕はとある繁華街のコンビニでアルバイトをしている。

夜の時間帯が担当で、繁華街なこともあり、客層は余り良くないが、反面マイナーチェーンなため規則もゆるゆるだ。

ゆるゆるの魅力と、僕の好青年らしい責任感の強さ、持ち前の保守的傾向もあり、何だかんだで二年ほど働き続けている。

お客さん以外に顔を合わせるのは、稀に顔を出す店長と、年上の同僚の渡辺さん、そして同い年の同僚の『究極の堅物』こと須田さんくらいなものだ。

その日は渡辺さんのシフトで、今日も今日とてせっせと労働に

励んでいたのだけど。どうも集中出来なかった。

昼間、夢猫のやつに言われた旅行のことが気になっていたらしい。らしくもなく弁当のソースをレンジで爆発させて、酔っ払ったサラリーマンに平謝りしたり、商品の段ボールを落としかけて冷や汗を流したり、散々な有り様だった。

余りの様子に渡辺さんも気付いたらしく、帰りがけ「どうしたのよ今日は？」と話しかけられた。

渡辺さんは、年齢は30代中盤ほどだろうか。仕事を掛け持ちしているらしく、いつも眠そうな目をしている。

家族はおらず、気儘なる独り暮らしを楽しんでいるそうだ。あちこちに知り合いがいるようで、よくお客さんと親しげに話しているのを見掛ける。

バイト先には僕より後に入ってきたものの、長年の修行により力の抜き方の秘法を習得しているらしく。仕事に粗はないのに、何故か渡辺さんと組むと僕の仕事量が1・5倍になるナイスガイだ。

ここは年長者の意見を聞いてみるのもいいかも知れぬ、そう思いチャットのことは隠して、京都へ友人に会いに行くか迷っていると渡辺さんに打ち明けたところ、「恋かね？若いね！おじさん応援しちゃうよー」と件の眠たい目のまま、てんで検討違いなことを言われた。

…ダメだコイツ、と思った。

残る一つは家のこと……と言おうとして、僕はふと一つ語り忘れていたことに気付く。

それは、アルバイトの帰り道のこと。アルバイトが終わるのはすっかり深夜で、流石の繁華街もピーク時の騒がしさは収まり、どこことなくしっとり気だるげな雰囲気満ちている。

仕事上がりの解放感を抱え、疎らな人びとの間を歩き、艶やかな提灯の赤やネオンの躍る店構えを見て歩くのは、なんとなくこそばゆい気持ちにして、好きな時間だったりするのだ。

…そうして後には、惰眠を貪るか、本を読んでいるか、悶々と思いつくかの家が待っているだけである。

その日も僕は早々に寢床に潜り込み、けれどいつもとは違い、布団の中で目だけを爛々と輝かせていた。

旅行：ああ旅行である。思えば、確かに僕に足りなかったのは旅行かも知れぬ。進学校であったこともあり、高校の修学旅行は多数決で中止になったから、振り返れば、旅行らしい旅行は中学の修学旅行以来記憶にない。

非日常の甘い囁き。暗い現実など放り出して、見知らぬ土地を歩き、見知らぬ土地の空気を胸一杯に吸い、名物料理を食べよう。ついでに夢猫のやつにも土産の一つでも持って行ってやろう。

旅先での思わぬ出会いもあったりしちゃうかも知れない。いや、

期待している訳ではないが、僕ほどの人間にもなればその可能性は十分に有り得る。

そうだ、京都へ行こう。

∴ 夢を膨らませてる内、夢は僕を包み込み、僕はいつの間にか夢に沈んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8844y/>

犬と猫

2011年11月26日16時45分発行